講孟余話（抄）、松本三之介訳、中央公論社「日本の名著31」吉田松陰

〇孟軻（もうか）はすう（馬へんに芻）人なり。斉の宣王（じん せい）・梁（りょう）の恵王に遊事す。

《解説》『講孟余話』は、松陰が野山獄および杉家幽室で幽囚の生活を送っていた当時、安政二年六月十三日から翌年六月四日にいたる一年間、同囚および親戚の者とともに、『孟子』を購読した際の読後の感想や批評・意見等を各章ごとに記し、一書にまとめたものである。稿の完成は安政三年六月十八日であった。参加した者のなかには、（叔父）久保五郎左衛門、高洲滝之允、玉木彦介、（隣人）佐々木梅三郎などがいる。

『講孟余話』は、はじめ「講孟箚記（さつき）」と題された。箚は針で刺す意で、箚記は、書物を読んであたかも針で皮膚を刺し鮮血がほとばしるように、その意義に肉薄し、また針で衣を刺して縫いとるように、その文章の意味を明確にする意であるが、松陰はその域に達せず、『孟子』講義の余話でしかないとして改題した。

（朱子『孟子集註』序説。『史記』列伝からの引用）

経書を読むにあたって、第一に重要なことは、聖賢におもねらないことである。もし少しでもおもねるところがあると、道は明らかにならぬし、学問をしても益なく、かえって有害である。たとえば、聖賢といわれる孔子や孟子のような方も、自分の生まれた国を離れて他国に行き仕官しようとされたが、これは納得のいかぬことである。

およそ君臣の関係と父子の関係とは、その意義・本質を同じくするものである。自分の主君は暗愚であるからといって自国を去り、他国に行って新しい主君に仕えようとするのは、ちょうど父親を頑固で愚か者だとして自分の家を飛び出し、隣家の年寄りを父親とするようなものである。孔子や

孟子が、この君臣間の本義を誤られたことは、いかようにも弁解の余地のない点である。

しかし、つぎのようにいってこれを弁護する人もいる。すなわち、孔子や孟子の道は広大であり、しかもその精神は天下をよくしようとするところにある。なにも自国だけが問題なわけではないのだ。要するに、名君・賢主にめぐりあって自分の正しいとする道を行なうことができるようになれば、結局は天下全体がその恩恵をうけることにもなるのだから、自分の生まれた国もその天下の一国として当然その恩恵をこうむることになるのである、と。

しかし、自分が思うに、天下をよくしようと考えて自分の国を去るのは、国を治めるのだといって自分の身を修めることを考えないのと同じである。

「身を修め、家を斉（ととの）え、国を治め、天下を平らかにする」というのは、

『大学（けい）（儒教の経典。四書の一。朱子が経一章と伝十章とに区別し注釈を施してから、世に重んじられた。経については明明徳・新民・止至善を三綱領とし、格物・致知・誠意・正心・修身・斉家・治国・平天下を八条目とした）』の冒頭に出てくる実践の順序で、それは決して乱すべきものではない。たとえ一身一家を捨てて国を治め天下を平らかにしたとしても、それは管仲（かんちゅう）（春秋時代の斉の宰相。垣公に仕え、斉の富強につとめた）や晏嬰（あんえい）（春秋時代の斉の宰相。霊公・荘公・景公に仕えた）のごとき者のやり方と同じで、いわば正道をふまずに獲物を手にするようなものである。

世間では、君主に仕える道を論ずる者のなかに、「功業立たざれば国家に益なし」というようなことをいう者がいる。これは大きな間違いである。

「道を明らかにして功をはからず、義を正して利をはからず」とこそいうべきで、君に仕えて意見が合わないときは、諫死（かんし）するもまたよいではない

か。

こういう結果になってしまっては、一身の功業も名誉もまったくなくなってしまうように考えられようが、決してそんなものではない。人臣たる者の道を失わず、永く後世の規範となることにより、後世かならずその事蹟・精神に心を打たれて感憤興起する者が出るにちがいない。そしてついにはその国の気風も正道に一定し、賢愚貴賤の別なく、すべての節義をあがめ尊ぶようになるのだ。

だから自己一身についていえば、功業も名誉もないようだけれども、百年千年の遠い将来のことを思えば、その忠義たるゆえんは、じつに測り知れないものがあるのではないだろうか。これを目さきの忠義とは違った大忠というのである。

しかしながら僕のこの議論は、そもそもわが国の国体に即して出てくる論である。漢土にあっては君たる道も自然違っている。たいてい聡明叡知衆にぬきんでた者が、その国の君長となるというのが道となっている。それゆえ尭（中国古代伝説上の聖天子。五帝の一人。位を舜に譲った）、舜（中国古代伝説上の聖天子。五帝の一人。尭に用いられ政治にあたり功績をあげる。尭から位を譲られ、天下をよく治めた。禹に位を譲る。禅譲の典型）はその位を他人に譲り、湯（殷の初代の王）・武（周の初代の王）はその主君を放伐したけれども、聖人の道になんらそむくものでないとされている。わが国は、上は天朝より下は列藩にいたるまで、君たる地位は千万世にわたって世襲し絶えることがない。この点は、とうてい漢土などの比肩しうるものではないのだ。

それゆえ漢土の臣は、たとえば半年期限で一人の主人から他の主人へと渡り歩く奴婢のようなものである。主君の善悪によって仕えるべき主を

選び移ることは、もとより当然のこととされる。しかしわが国の臣は、何代にもわたって主君に仕える譜第の臣であるから、主人と生死をともにし、喜憂を分かちあい、たとえ死に至るとも、主を捨てて去ることを認めるがごとき道は絶対にない。

ああ、わが父母は何国の人であるか、わが衣食は何国の物であるか。書を読み道を知る、これまただれの賜物(たまもの)であるか。今、少しばかり主人と意見が合わないからといって忽然(こつぜん)とその国を去るとは、人たる者の心として、はたしてどんなものであろうか。僕は、孔子・孟子を今ここに呼び起こしてきて、いっしょに君臣の義を論じあいたいものだとさえ思う。

聞くところによると、近ごろ道をわきまえぬヨーロッパの諸国は、それぞれ賢智の人物を推挙し、その政治を革新し、たいへんな勢いでわが国を凌侮(りょうぶ)する形勢にある。われわれはどのような方法でこれを制することができるだろうか。それはほかでもない、前に論じたように、わが国体がそもそも外国とは異なっている、その意義を明らかにし、日本全体のために全国の人びとがみないのちを投げ出し、藩全体のためにはその藩の人すべてがいのちを投げ出し、臣は君のために殉じ、子は父のために殉ずる、という志が確固不動のものとなっているならば、どうして西欧諸国を恐れる必要があろうか。願わくば、諸君とともにこのために努力したいものである。